

動揺する作家の苦悩

—— ペーター・ハントケ 『不滅への準備』 ——

狩野 智洋

1. 序

センセーショナルを巻き起こした『ドナウ川、サヴァ川、モラヴァ川、ドリナ川を巡る冬の旅——セルビアに対する公平』（Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien, 1996.以下『冬の旅』と略記）が1996年1月に発表されたのに対し、『不滅への準備』（Zurüstungen für die Unsterblichkeit, 1997.以下『不滅』と略記）の初演（ウィーン・ブルク劇場 クラウス・バイマン演出）は1997年2月8日であるが、前者が95年11月27日から12月19日にかけて執筆されたのに対し、後者は実はその直前の時期に当たる95年1月から9月にかけて執筆されたものである。初演は大成功だったと各劇評が伝えている。またどの評者も『不滅』は特定のケースを扱ったものではなく、人類一般に当てはまる事柄を伝えようとしており、ユーゴ紛争とは殆ど無関係だと見ている。確かに『不滅』は最終的には全人類を視野に入れて書かれていると言えるが、その背景にある、作者ハントケにとっての理想の国旧ユーゴスラヴィア崩壊に対する彼の危機感と焦燥感が『不滅』に強く現れている点を決して見逃してはならないだろう。『不滅』はユーゴ紛争に対するハントケの見解と彼の持つ作家（芸術家）像が融合して出来たものとも見ることができる。だがそこには『冬の旅』に見られるような作者の確固たる信念に裏付けられた批判とはほど遠い、内面の「揺れ」が登場人物達、特に主人公パブロの姿や台詞から窺われる。この揺れがどのようなものなのか、何に起因するものなのかを論じ、当時のハントケの内面

を探してみたいと思う。

その際本作のキーワードとなっている「不滅」と「法」が何を意味するのか、どの様な意義を持つのかを明らかにしたいと思っている。それによってハントケの内面の揺れの本質も明らかになると思われるからである。

2. 不 滅

この作品は、占領軍の軍隊によって強制的に徴兵され、異国の地で命を落とした二人の息子の復讐を叫ぶ老人 (Der Großvater oder Ahnherr) の台詞で始まる。¹⁾ 老人の二人の娘は侵攻軍の兵によって、姉は強姦され、妹は合意の上でそれぞれ男子を身ごもっていることが述べられ、老人はそれぞれに息子たちの名を与え、パブロ・ヴェガ (Pablo Vega) 2世、フェリペ・ヴェガ (Felipe Vega) 2世と名付け、まだ母親たちの腹の中にいる孫たちに二人の息子の復讐を託して絶命する。(ZU, 8ff.) この祖父の台詞から、この地が他国の領土、他の民族、他の言語圏から囲まれた飛び領地であり、この土地の者達が外部から侵害されても決して反抗することもなく、むしろ自分たちを傷つける方向で反応してきたことが分かる。(ZU, 8f.) 祖父は孫たちに、自分たち自身に対してではなく、自分たちに不当な行為を行う者達に立ち向かう、この土地最初の反抗者になれと言う。(ZU, 10) ついでながら言い添えておくと、飛び領地と言えば、クロアチア国内でセルビア人勢力が創設を宣言し、95年8月にクロアチア軍によって一部を除き制圧された「クライナ・セルビア人共和国」やコソヴォも同様のものであり、ここで『不滅』がユーゴ紛争と何らかの関連があることが予想される。

ここには変化に対する希求が見られるが、同様の希求は一人の人物によって演じられる民 (Volk) や老人の二人の娘の台詞にも見られる。民によれば、この地には戦いも起こらず、平和条約が締結されたこともなく、窓からの転落事故もなく、この土地固有の伝説すらない。(ZU, 19) 良い意

1) Handke, Peter: Zurtüftungen für die Unsterblichkeit. Ein Königsdrama. Frankfurt a/M 1997, S. 8 以下 (ZU, 頁数) とする。

味でも悪い意味でも、とにかく有名人というものを輩出したことがない。(ZU, 19) ほんの僅かの歴史すら孕んではいない。(ZU, 20) 従って「ここには伝説も、歴史も、偉人も存在しない」(ZU, 21)のだ。彼の変化への希求は、有名になること、偉大になることへの希求でもあり、世界的に不滅(朽)になることでもある。

しかし、名声を望み、数多くの成功を手にしたパブロは帰郷した際の独白でその虚しさを語っている。成功を収めた当初は胸が熱くなり、すぐさま誰かと、できるだけ多くの人々とこの成功を分かち合いたいと願うが、分かち合う相手がいないと嫌悪感に襲われる。もっとも自分も含め、すぐに厄介払いしたくならないような相手は今まで一人としていなかった、と。そしてこう続ける。「こういう日が偉大であれば偉大であるほど、その都度陶醉から覚めた時の悲惨さはひどいものだった。俺の人生で今まで成功した日や勝利した日には必ず罪と死がつき纏っていた。俺が懂れているのはギルガメッシュ王やツタンカーメン王、サルヴァトーレ・ジュリアーノやチェ・ゲバラ風の不滅ではなく、死のない一日だ。」²⁾(ZU, 65f.) 従っていわゆる偉大さや名声によって不滅(朽)になることはここでは否定されることになる。

またパブロは語女^{かなりめ}(Erzählerin)との会話の中で更に次のように言っている。「俺が自分の親族、同郷人、民族同胞の全員を誇りに思えるとしたら、それは彼らのいわゆる業績が彼らの死後残らないからだ。そして彼らと同じくらい跡を残さないことが、俺には自分の義務のように思える。いわゆる不朽の名作を見てみる。それらは殆ど全部煩わしく不朽であるばかりか、醜悪に不朽だ。[・・・]空間を食いつぶす不朽の名作(raumfressende Unsterblichkeiten)だ。皆ぞっとするほど忘れられていない。忘れ去られたものに誉れあれ。」(ZU, 109f.)「空間を食いつぶす不朽の名作」と言う

2) ハントケは現代という特殊な時代には成功の「瞬間」や成功した「一生」(永遠の成功)ではなく、「成功した一日」こそがテーマになり得ると考えている。

Handke, Peter: Versuch über den geglückten Tag. Frankfurt a/M (suhkamp taschenbuch 2282), 1994. S. 11ff.

表現がでてきたが、これについては後に詳しく論じる予定である。避難民の女 (die Flüchtlingin) も、この飛び領地では自分だけが駄目な人間のままだと言うフェリペに対してこう言っている。「あなたの時代だってくるわよ。仮に来なかったとしたら、それは尚更いいことだわ。勝利の喜びに浸っているあなたなんか想像できないでしょ。勝ち誇った勝利者の横にいる私なんて想像できないでしょ。今時のリーダーって人たちを見てると、凡人こそ喜んで良いんだって思うわ。」(ZU, 107f.) これらの台詞からは世に残るような特別なもの、際だった不滅のもの、及びそれを賞賛することに対する批判を読むとすることが出来るが、ハントケは対談で更に次のように語っている。「私にはごく当たり前のことなのですが、あらゆる芸術の営みあるいはそれによってもたらされる提案は、それは、日常を持ちこたえるというだけではなく、日常を所与のものとして捕らえ、日常と付き合うことを目指しているんです。全てがそれを目指しているんです。つまり、誰かが台所にいる時や靴を磨く時、会社へ行く途中、或いは会社の中で行う毎日のちょっとした仕事。それに尊厳を与えること。—— 記念碑の建つ台座を作ることじゃなく、日常的な事柄に尊厳を与えること、日常の繰り返しの中の偉大さ、これは私には継続の別名なんです、それを示すことです。」³⁾ この発言から考えると、民の希求の背景には、この日常に尊厳を与えるべき芸術の欠如があると考えられる。新しい語部 (Erzähler) が必要だ、と民が述べている (ZU, 23f.) 点からもそれが窺われる。

またフェリペの母である妹もパブロの母である姉にこう語っている。「あの子たちにおじたちのことをもっと話して聞かせなくちゃいけないわ。それもおじたちの死や殺害についてじゃなく。不滅の何かを。不滅なこと、小さな、二、三の、二、三粒の種になることよ。十年後にまだ芽吹き、百年後には—— 私たちの死んだ兄弟についての種物語を。」(ZU, 35) 滅びることのない、小さな、種となる物語の具体例を彼女がいくつか挙げている。

3) Gamper, Herbert/Handke, Peter: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen. Frankfurt a/M. (suhkamp taschenbuch 1717), 1990. S. 115f.以下(ZR, 頁数)とする。

そのうちの2例を挙げておく。家の前で遊んでいた兄弟のうちの一方がいつの間にかいなくなった時、既に表面がすっかり黒く平らになっている肥溜めの底に沈んでいるのを、もう一人が救い出して糞尿を肺から吸い出して生き返らせた。(ZU, 36)成績優秀者としてこの土地から遠く離れた寄宿学校に入れられた兄弟の一方が、ホームシックに耐えられず一週間歩き続けて皆が寝静まっている頃に家にたどり着いたものの、すぐには家に入らず庭掃除をしていた。(ZU, 37)これらのごく普通の人物が、たとえ広範囲にわたることはないにしても、身近な者達にとって、いわば英雄(主人公)として立ち現れるような話である。つまり『問いの技法』(Die Kunst des Fragens, 1989)にもあるような、自分自身と自分の身近にいる者達が英雄(主人公)や孤独な者であることを知らしめる⁴⁾話である。これは『ベルリン・天使の詩』(Der Himmel über Berlin, 1987)のホメーロス(Homer)の台詞とも呼応している。彼は、もはや百年という単位で考えることは出来ず、一日一日で考えるしかないと述べ、更に、「私の主人公はもう戦士や王たちではない。そうではなく・・・平和なものたちだ。目立たないものたちだ(eins so gut wie das andere)。乾いた玉葱でもいいし・・・、ぬかるみを渡してくれる木の幹でもいい」と述べている。⁵⁾「大きな物語」ではなくこのようないわば「小さな物語」によってこそ、他者に対する共感や理解を可能にする想像力がもたらされるが、これに関しては既に他で論じたのでここでは割愛する。⁶⁾

4) Handke, Peter: Die Kunst des Fragens. Frankfurt a/M (suhrkamp taschenbuch 2359), 1994. S. 26.以下 (KF, 頁数)とする。『問いの技法』に関しては拙論「共通の存在形態としての問い——ハントケの『問いの技法』——」(岩淵達治先生古希記念論集『ドイツ演劇・文学の万華鏡』同学社 1997年12月27日 S. 127-140)を参照のこと。

5) Handke, Peter/Wenders, Wim: Der Himmel über Berlin. 3. Aufl. Frankfurt a/M, 1989. S. 56f.

6) この点に関する拙論は前掲論文の他「ハントケに於ける Gerechtigkeit」(『学習院大学ドイツ文学会 研究論集』第2号 学習院大学ドイツ文学会 1998年3月25日 S. 59-79)及び「見ることを訓練する劇——ペーター・ハントケの無言劇『互いのことを何も知らなかった頃』——」(『ドイツ文学』第103号 日本独文学会 1999年10月15日 S. 79-89)がある。

従って『不滅』でテーマとなる「不滅」は、なんら特別なものではなく、日常の中にごく普通に見いだされる日々の生活に尊厳を与えるものであるということが出来る。そしてこのような不滅観（価値観）こそが現代においては重要性を持つということになろう。

3. 空間排除

『不滅』には「空間排除団 (Raumverdrängerrotte)」と呼ばれる一味が登場する。これが何を意味するのか考察してみたい。

ハントケは対談の中でこう語っている。「ええ、私は場所の作家 (Orts-Schriftsteller) であり、今までもずっと場所の作家だったんです。私にとって場所は、まずもって体験を生じさせる空間 (Räume)、境界 (Begrenzungen) なのです。私の出発点は決して歴史や事件、出来事ではなく、常に場所だったのです。私は場所を記述するのではなく、場所を語りたいんです。それが私の最大の喜びです。」(ZR, 19) また同じ対談で次のようにも言っている。「私が念頭に置いているのは、隙間 (Zwischenräume) です。そこでは私の問題が、[...] そこではそれらがまだ生きている (spielen) のです、が、とても狭い [...]. でも私は隙間だけを糧としているんです。歴史が益々 [...] 2隻の空母のように互いに近づき、もう殆ど隙間をなくしているようなところで、[...] でもこの隙間を、これをかいま見ること

を糧として生き、書いているんです。私がしたことは全てこの狭まりつつある隙間を糧としているんです [...]。」(ZR, 151) 更に別の箇所では隙間と空 (die Leere) について次のように述べている。「私にとって——これははっきり申し上げることが出来ますが——この体験よりも大きな価値を持つものは存在しないんです。この空の開示よりも、[...] 群衆の中でこれらの隙間が見えるということよりも。またこの群衆の中の隙間によって [...] 個々の人間が初めてその姿 (Gestalt) を得るのです。——これは正に正しいと思っています。[...] そして、歩いている人々や立っている人たちの足が見える地面を見ていて、突然、まだ非常に多くの空が

残っていることに気がついたんです。この混雑した中で地面が空^{くう}に見えた、つまりとても広い広い場所 (Platz) に。[・・・] 私の前には顔も姿もない群衆がいて、そして奇妙に空っぽな地面から初めて人々の姿が現れる。それを私は物語るんです。そしてこの空^{くう}の生じる瞬間よりも愛に関して偉大な瞬間なんて考えられません。」(ZR, 129f.) また『問い』の技法でも土地の者が「隙間はもうない——だから問いもはやない」(KF, 159)と語っている。空間と言ひ、隙間と言っているが、この空間、この隙間がハントケの執筆にとって、彼の生にとって欠くことの出来ない重要性を持っていることが分かる。

自分を変えるために飛び領地から出来るだけ離れた土地へ行くよう母から言い渡されたフェリペがそれに反論する台詞の中に次のような言葉がある。「向こうの大国の人たちはついこの間の戦争ももうとっくにまた自分たちの貸し方に記帳して、よそ者はせいぜい良くても見習い店員の扱いだ。奴らに立ち向かえるとしたらパブロのような人だけかも知れない。そしてほとんど至るところが奴らの勢力範囲になってしまい——自分たちの国なんかもう必要なくなっている。奴らは行く先々で発言権を主張し、平和のさなかに空間を排除してしまう。ここだけはまだ、まだ大丈夫。」(ZU, 42) この最後の言葉からこの飛び領地には作者ハントケの生と創作の原点となる空間がまだ残っていることが窺われる。あるいはこの飛び地が正にその空間、隙間であるとも言える。更にハントケが、語るということは彼にとっては、常に、人間に相応しい世界を描くことなので、語ることが出来ないということは、人間に相応しい可能性がないということだと述べているので (ZR, 167)、飛び領地にまだ空間があるということは、まだ語ることが出来るということであり、取りも直さず、人間に相応しい可能性が残されているということになろう。

このことを空間排除団の首領の台詞が端的に示している。「ここには最後の自然もしくは自然さが残っているとわれ、ここの住民は最後の天然自然の人間 (Menschennaturen) と呼ばれている。そうさ、俺にだって昔は

自然さ (eine Natur) ってもんがあった。それがここの住人を見て受けたショックであつという間に排除されちまったんだ。——そしてそれが俺たちの目標よ。俺が最後の自然さを奪われたように、他の奴ら全員からも奪ってやるんだ！」(ZU, 54) 自然はハントケにとって人間の想像力を刺激する、芸術にはなくてはならぬものだが、⁷⁾更に首領の台詞では空間が居場所 (Platz) 及び自然と同一視されている。(ZU, 55) また自然を奪おうとする、自らが不自然な空間排除団の登場によって、空に本来の広々とした自由な (frei) 感じがなくなり、その雰囲気を失うことがト書きに記されている。(ZU, 52) これらの点を総合するなら、空間を排除することは自然を排除して居場所を奪い、想像力を奪うことでもあり、更に人から輪郭を奪い、その特質を奪うことに他ならない。これはまた個人の尊厳を奪うことに他ならず、虐げられた人々に再びその権利を与えるために執筆するハントケの立場⁸⁾とも、また、飛び領地の人々に誇りを与えるために法を見いだそうとするパブロの態度とも全く逆の立場である。空間排除団もまさにパブロを執拗に攻撃している。ここにパブロ及びハントケと空間排除団の対立の図式の持つ意味が多少明らかになったと思う。この対立の意味をより明確にするため、空間排除団についてももう少し詳しく見てよう。

空間排除団の首領は空間をひとしきりけなし、自分たちを「空間掃除機、[既に存在しない] 偽造された隙間の掃除機」(ZU, 56) と呼んだ後「空間ではなく刺激を！」(ZU, 56) と叫ぶ。そして首領に次いで空間排除団員 1、2 が退場し、一人残された空間排除団員 3 の独白にこの空間排除団のモデルが暗示されている。「なぜ俺たちは本当に平静さ (Ruhe) を与えられないんだろう。一方ではローマ人の撤退、もう一方ではアラビア人が撤退して以来そうなんだ。それでも全ての民族の中でも俺たちの優越性はもうずっと前から認められている。世界はいずれにしても俺たちのものだ。もうと

7) この点に関しては拙論「ある芸術家の救済——ペーター・ハントケの『村々を巡って』——」(『学習院大学人文科学論集』第4号 学習院大学大学院人文科学研究科 1995年9月30日 S. 105-124) を参照のこと。

8) 前掲拙論を参照。

うから俺たちの国の金は全世界に流通し、俺たちの国の専門家たちも、支社も、俺たちの言葉の言い回しも（*unser Gewußtwie, unser Gewußtwo*）、プログラムも、略語も、秘密番号も、別荘も、10軒めの別荘も世界中至る所にある。それなのに何故俺たちは平静さを与えられないんだろう。俺たちの国は唯一の超大国（*das Größte Land*）だ。最高の法を持ち、最も洗練された風景を持ち、女たちは世界中で一番魅力的で、最も信頼される心臓移植技術、最も分厚い新聞、最多のノーベル賞受賞者に、オリンピック金メダリストに、建築コンテスト優勝者[・・・]——それなのに何故俺たちは平静さを与えられないんだろう。」（ZU, 58f.）ハントケは「人間の最も偉大な状態は平静さ、静かな注意であり、承認できるということであり、受け入れること、そして知覚する際既にいわば叙事詩を見ていることだ」（ZR, 51）と語っており、また空間排除団員3も「生きる喜びとしての平静さ、理念としての平静さ。何故俺たちは平静さを与えることができないんだろう」（ZU, 59）と語っているが、それによれば世界で最も強大な国が人間に、「刺激」を与えるのみであって、その「最も偉大な状態」を与えることが出来ないということになる。そして空間排除団員3の台詞から、空間排除団が暗にアメリカを指していることは明らかであろう。冷戦終結以来唯一の超大国となったアメリカは、世界の警察官を自任し、ボックス・ローマーナに倣ってボックス・アメリカーナという言い方もなされるようになった。殆ど彼らの勢力範囲になり、行く先々で発言権を主張するとフェリペの台詞にあったが、冷戦終結以降のアメリカがまさにそうであることは言を俟たない。ここにパプロ及びハントケ対空間排除団（アメリカ）の対立的図式が浮かび上がる。この対立には、個人からその輪郭、特質を奪い個人の尊厳を奪う、刺激しか与えられない後者と、逆に個人に輪郭を与え、特質を明らかにすることによって個人に権利を再び与えようとする、平静を重視する前者の対立という意味もあるが、それ以外にもユーゴ紛争を巡る、作家であり個人であるハントケと世界の警察官を自認する唯一の超大国アメリカの立場や対応の違いがある。ここにはそのアメリカを初め

とし、「民族自決」の原則から、スロヴェニア、クロアチアの独立を認め、民族同士が血で血を洗う内戦の一因を作った欧米諸国⁹⁾のユーゴ紛争への対応に対するハントケの批判が読みとれる。

『不滅』が執筆されていた当時、アメリカを始めとする欧米諸国はボスニア内戦に関して、一方的にセルビア人勢力を非難し、94年7月以来米露英独仏5カ国からなる「連絡調整グループ」は、「アメリカの主導で形成されていたムスリム勢力とクロアチア勢力からなるボスニア連邦に51%、セルビア人勢力の『セルビア共和国』に49%の領土配分」¹⁰⁾をして、つまり二分割して事態を収束させようとしていた。一方ハントケは、既に1991年の時点で『第九の国からの夢想者の別れ』(Abschied des Träumers vom Neunten Land, 1991以下『第九の国』と略記)の中でこのように述べている。「そう、ユーゴスラヴィア内の新しい国境だ。私には、それらが外に向かうどころか、現在の各共和国内において、内側に向かって、各共和国内部に向かって延びてゆくのが見える。非現実地帯又は非現実帯域として延びてゆく。中心に向かって延びてゆく。そして間もなく国がなくなる。スロヴェニアもクロアチアももはや存在しなくなる。モンテカルロやアンドラと同じように。そうだ、私は恐れている。いつの日か《スロヴェニア共和国》には味わいのある土地がなくなってしまうのではないか。アンドラのように、残された唯一の広がりと言えばピレネーの岩々を破壊して縦横に走る商業道路のみとなり——いわばパークアヴェニューや五番街の延長としてマンハッタンからこの山脈へ続く商店街や銀行街によってびっしりと囲まれ、そして土地や地域、空間、場所、そして現実の持つ味わいがとっくの昔に圧殺されてしまっている、文化の香を失い、とうにその魂を失った民間伝承の無駄なおしゃべりばかりが残ってしまうのではないか。」¹¹⁾

9) 柴宜弘編『バルカン史』山川出版 1998年 S. 376を参照。

10) 前掲書S. 377

11) Handke, Peter: Abschied des Träumers vom Neunten Land. Erinnerung an Slowenien. In: Handke, Peter: Langsam im Schatten. Frankfurt a/M (suhrkamp taschenbuch 2475), 1995, S. 182-197, hier S. 195.以下(LS, 頁数)とする。

またアメリカを中心とする NATO 軍はセルビア人側の譲歩を引き出すため、95年8月にセルビア人勢力に本格的な空爆を加えた。それに対してハントケは、拙論「ハントケに於ける Gerechtigkeits」¹²⁾ で述べたように旧ユーゴスラヴィアを構成していた諸民族が共通の思い出を手がかりとして再び融和することを望んでいた。

だが、事がそれ程容易でないことはハントケも認識していたと思われる。これが「法文」を巡るパブロの苦悩に直接反映されている。これについて次節で論じたいと思う。

4. 法

法 (Gesetz) に関する申命記の記述が旧約聖書からモットーとして引用されている事からも予想されたとおり、「法」が『不滅』のテーマの一つに挙げられる。その法とはどのようなものなのか、まず考察してみたい。

申命記からは第 30 章 11 節から 14 節が引用されているが、モットーに掲げられている文章と聖書中の実際の文章は異なっている。旧約聖書では次のようになっている。「わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、また遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、《だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが》と言うには及ばない。海のかなたにあるものでもないから、《だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが》と言うには及ばない。御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。」¹³⁾ („Dieses Gebot, auf das ich dich heute verpflichte, geht nicht über deine Kraft und ist nicht fern von dir. Es ist nicht im Himmel, so daß du sagen müßtest: Wer steigt für uns in den Himmel hinauf, holt es herunter und verkündet es

12) 注 6) を参照。

13) 『聖書 新共同訳』日本聖書協会 2000年 S. (旧) 329

uns, damit wir es halten können? Es ist auch nicht jenseits des Meeres, so daß du sagen müßtest: Wer fährt für uns über das Meer, holt es herüber und verkündet es uns, damit wir es halten können? Nein, das Wort ist ganz nah bei dir, es ist in deinem Mund und in deinem Herzen, du kannst es halten.“¹⁴⁾ 一方モットーの文章は以下の通りである。「わたしがあなたに与える法は、あなたの遠く及ばないものではない。それは諸々の天にあるのではない。それは諸々の海のかなたにあるのではない。法文はあなたのすぐそばにある。それはあなたの口にありあなたの心にあるのだから、あなたはそれを行うことができる。」 („Das Gesetz, das ich dir gebe, geht nicht über deine Mittel. Es ist nicht in den Himmeln. Es ist nicht jenseits der Meere. Das Gesetzwort ist ganz nah bei dir. Es ist in deinem Mund und in deinem Herzen, damit du es umsetzt in die Tat.“) (ZU, 5)

原文の「天に」(im Himmel)「海の」(des Meeres)が単数形であるのに対し、モットーでは「諸々の天に」(in den Himmeln)「諸々の海の」(der Meere)と複数形になっているのは、この文章からキリスト教の色合いを除き、諸地域、諸民族の天という個別化を目指し、多文化を視野に入れるための措置と考えられる。また、モットーの文章が原文よりかなり短くなっているが、内容的にはほぼ同一であり、表現が簡潔になった分ハントケの意図がより明確に示される結果となっている。その意図とは、人間に与えられる法が決して人間の能力を超えるものではなく、しかも人間の内部に存在するものである。このことは取りも直さず、この法が、実際には決して外部のものによって強制的に押しつけられるものではなく、人間に本来備わっているものということができる。原文の「戒め」(Gebot)を「法」(Gesetz)に書き換えている点にもそれが表現されていると言える。

また原文では法の仲介者が不要であると述べられているが、モットーで

14) Die Bibel. Altes und Neues Testament. Einheitsübersetzung. Freiburg, 1980, S. 205

はこの部分が完全に削除されている。これはハントケが法の仲介者が必要だと考えているからに他ならない。ある手記には絶望に陥った少女を見て、「彼女のような人に、それに相応しい記念の碑 (Denk-mal) を建てる以上のことが出来ないだろうか。この人間に — 人類に — 権利をもたらす新しい法に着手すべきなのかも知れない」¹⁵⁾ と思ったことが記されている。『不滅』では、14年間の修養の旅を終えて飛び領地に帰郷したパブロが早春のざわめきの中に天使の声を聞く場面があり、彼は次のように告げられる。「自分と、そしてここにいる自分の同胞たちのために法を作るのだ。未だかつてなかったような法を。自ずとすぐに理解できるような法を。どこにでも誰にでも通用する法を。— 自分自身のためにも。利口になるのではなく — 見つけ出すのだ! (nicht findig — fündig werden) 飛び領地の世間から捨てられた状態をこれ以上自分たちの指定席にしてはならない。」(ZU, 63)

ところで法の仲介者を目指すという点のみならず、ハントケとパブロには更に次のような共通性が見られる。パブロは次のように言う。「俺が一番欠けているものは、法文 (Gesetzesrede) が同時にまた絶えずイメージを抱かせること (InsBildsetzen) になるような距離を見つけることだ。イメージがなければ法はない。新しい法は見ると同時に見られるものでなくてはいけない。盲目の法はもうたくさんだ。」(ZU, 98f.) ハントケが概念ではなくイメージ (像) を重視していることは既に論じた通りであるが、¹⁶⁾ 彼はまた、生命を与えてくれるものとして体験したものから、法として通用する、説得力のあるモデルを作り出すことが自分の義務だと自負していると述べている。(ZR, 120) 従ってパブロもハントケも同様に人々のイメージでき

15) Handke, Peter: Am Felsfenster morgens (und andere Ortszeiten 1982-1987). Salzburg und Wien, Residenz Verlag, 1998. S. 12

16) 拙論「ハントケの思考実験 — 『非合理的な者達は死滅する』 —」(『ASPEKT』第32号 立教大学ドイツ文学研究室 1999年2月26日 S.143-164) 及び「見ることを訓練する劇 — ペーター・ハントケの無言劇『互いのことを何も知らなかった頃』 —」(既出) を参照のこと。

る法を提示することが自分の責務であると考えていることが分かる。

ハントケは更に法をルール (Regeln) と言い変えて次のように語っている。「自分と対面する世界に内在するルールをプレーヤー自らも見つけなければなりません。それは彼によって独裁的に据えられたルールであってはならず、自分と他者に適うと確信できるルールを見つけなければならないのです。[・・・] ルール、この穏やかな法則 (dieses sanfte Gesetz)¹⁷⁾、これは外界において見つけられなければならないんです。外界との戦いもしくは遊びの中で作家は初めてルールを見つけるんです。それは彼のいわば支配下にあってはならないんです。」(ZR, 47) この引用文中の「自分と他者に適うと確信できるルールを見つけなければならない」という言葉は、先に引用したパブロに対し天使が語った、「どこにでも誰にでも通用する法を見つけだすのだ」という言葉と同値である。また「外界との戦いもしくは遊びの中で作家は初めてルールを見つける」とハントケは述べているが、パブロが14年間外界でもある諸外国を巡って帰国した後法を作ることは先に触れた通りである。またパブロは、空間排除団が自分がバランスを失った時に、自分に敵対し、非難することによってバランスを与えてくれる者として(ZU, 99ff.)、彼らを「自分を補完してくれる者達(meine Ergänzner)」(ZU, 103)と呼び、首領を「兄弟」(ZU, 102)と呼んでいるが、1988年に行われた対談でハントケは次のように語っている。「私は常に自分を疑っていますよ。ただ奇妙なことに、誰かに激しく非難されたまさしくその時にこそ、自分が誰なのかが、一番よく分かるんです。」¹⁸⁾ この様にパブロの台詞とハントケの発言を比較すると、両者の根幹が共通していることが分かり、両者の目指す法がおよそ一致していることが分かる。

さてパブロ及びハントケの目指す法とはいかなるものなのか。パブロは次のように語っている。「このような法がなければ、太陽も、色も、像も、

17) この言葉はシュティフターの『石さまざま』(Bunte Steine, 1853)の序文にある「おだやかな法則」(sanftes Gesetz)を念頭に置いて用いられている。

18) Müller, André/Handke, Peter: André Müller im Gespräch mit Peter Handke. Weitra, 1993. S. 90

踊りも、音も、声も、静寂も、歴史の中の今のような状況では偶然でしかなく、余地も基盤もない。生を制限するのではなく解放する、或いは生を制限しつつ解放する法。[・・・] ひとりひとりに固有の空間を見つけ、啓示し、残す法。[・・・] ここでこの新しい法を私に作る事ができたら、みんな、それはやがて、私の以前の勝利とは違い、私の永遠の憂鬱に変わることは決してない勝利となるだろう。生涯ここでは明るい考えだけが現れることだろう。」(ZU, 75) 従って、これまでに論じたことと併せて考えるなら、この新しい法はまさに老人がパブロやフェリペに課した復讐を求める古い思考法、万人を対象にする、百年、千年という大きな単位をもつ不朽に偉大さを求める古い思考法(価値観)に対し、一人一人を対象にし、平和をもたらす、小さな、日常的なものの中に偉大さを認める思考法(価値観)と捉えることができる。11場の空間排除団員1、2、3が一次元眼鏡をかけて見ると、4000年前のファラオの船、農家の立派な正面玄関、巨大な馬車の車輪が、それぞれ見せかけだけのほかないものに見えてくる。(ZU, 95)そして団員3が言う。「そしてここから新たな原動力、第三の風、理解(問題の解決)、新たな出発が生まれるのだろうか。」(ZU, 95)これらのことも新たな思考法(価値観)の必要性を示唆していると言えよう。

パブロの言う新しい法はまた新しい時代(時間)とも深い関わりを持っている。パブロはフェリペにこう言っている。「おまえの詩の一つにこう書かれていなかったか。《これらは互いを殺し合う。今、と、今、は。》ともかくも普通の時間が、その今と今が、その、今はこうで今度はこう、が俺を殺すんだ。朝の狭さと夕の広さが、或いはその逆が。今日は味方で明日は敵、が。この普通の時間の脈絡のなさは、思うに、俺のせいではなく、その、こういう時代の——俺たちの今の時代の——俺たちに定められた現代という時代のせいなんだ。俺たちの日常時(Alltagszeit)は俺たちに何でも与えてくれる。ある時は統一の陶醉を、またある時は分裂を。何でもだ。[・・・] 今のような時代は徹頭徹尾独裁者的な時代で、俺たちがこの時代の仲間や共演者になることを許さないんだ。そして俺たちのような

ものには、世界の終末といった慰めさえ与えられてはいない。世界の終末には少なくとも各自がどうしようもなく孤独に死ななければならないということはない。——世界の終末も終わってしまったんだ！——それどころか時代は今や、俺が自分は益々有限で短命だと思ってしまう程まわしく永遠に、流れ行き、跳んで去り、這うように移動し、停滞し、もんどり打ち、ジグザグに走る。俺たちが経験しているような今の時代はもはや俺たちの時代なんかじゃない。不滅を思うと、俺は新しい種類の時代を求めずにはいられなくなる。そしてその新しい時代を築くためにどうしても新しい法が必要なんだ。」(ZU, 90)この台詞には、「ある時は統一の陶醉を、またあるときは分裂を」とあるように、冷戦の終結と東西対立の解消、それによってもたらされたドイツ再統一や各地の民族紛争、特に旧ユーゴスラヴィアの崩壊、というようにめまぐるしく変化する現代という時代に対する、「俺たちがこの時代の仲間や共演者になることを許さない」現代という時代に対する、作者ハントケの不信感が露わになっていると読むことができよう。また何よりも、複数の民族が共存し、ハントケに現実感を与えてくれた現実の国、理想の国であった旧ユーゴスラヴィアが崩壊し、かつて一つの国を形成していた国民同士が、それぞれの民族の名の下にいつ果てるともなく殺し合いを続けている、この時代に対するハントケの焦燥感が現れていると言っても過言ではあるまい。従って、ハントケが極めて重視している共通の存在形¹⁹⁾とも考え合わせるならば、ここで言う新しい時代とは、個々をつなぎ合わせる時代でなくてはならないだろう。

そのような時代の前提となる法も、当然のことながら、個々をつなぎ合わせ、統一する法でなくてはならないことになる。実際、^{かたりめ}語女はパブロにこう語っている。「人間はこれまで以上に孤独になっているわ。他の人と自分の人生を分かち合う人なんてもう殆どいないのよ。しかも最後に自分について、これが私の一生の物語だ、と言える人も殆ど一人もいない。その代

19) 共通の存在形に関しては、既出各拙論を参照のこと。

わり今では、誰もが他人に向かって何度も、自分を忘れないでくれ、って言うわ。そのくせ自分は他人のことをとっくの昔に忘れてる。だから、愛が世界から消えてなくなる前に、一種の法が必要なのよ。しかも愛は日一日と消えてゆくわ。今の世界は全体が、人質に取られ、物置に鎖でつながれた孤児のようだわ。もうどんな自然も作り出せないような、あらゆる人々の気持ちを静めてくれる法を。満たされた無私（die erfüllte Selbstlosigkeit）としての法を！ やってみるべきよ。さあ。」（ZU, 121）この台詞で語女は、世界から愛が消え、人々を結びつけるものがなくなならないうちに、人々をつなぎ合わせる新たな明文化された法が必要だと主張している。

従ってこの新しい法とは、「共通の存在形」の一つとなるべきものだが、これまでの「共通の存在形」が言葉によらず、具体的な「形」で提示され、受け手の想像力を刺激すべきものとされていたのとは、多少ニュアンスが異なっている。この違いが語女の「語部だけが人間を理解することができるのよ」（ZU, 49）という台詞や、「わたしが話したことに以前から耳を傾けていれば、あなたには他の秩序は要らないし、明文化された規定も要らなかったのよ」（ZU, 48）という台詞の背景にあると考えられるが、法の制定に対する是と非の間で揺れるパブロの次の台詞もそのことを如実に物語っている。「それはバベルの塔建設以前にあった言語のような、一つの言語を再び見つけ出すというようなことになるだろう。——その当時法はまだ喜びと同じ意味を持っていた。そのためには、例えば、雀たちを見ることだ。でも何故雀たちを目にすることが益々少なくなっているんだろう。[・・・]俺はこういう類の人間だ。先ずただ《何かあること》をする。もちろん熱中できることだ。そして最後にやっとその何かが名前を得る。その事柄自体もまだ存在しなかったように、まだ存在しなかった名前を。だから、「法」は止めだ。——他方、今後百年間は地上に平和が訪れることなど考えられなくなっている。それにも拘わらず俺は平和を諦めることはできない。俺は平和の存在を信じている。そうだこれは一種の信仰だ。[・・・]そして偉大なる平和は宇宙の果ての星々にまで達するだろう。——その一

方で俺の中では全てがただ法以前の状態 (Vor-Gesetz) で、ただ形以前の状態 (Vor-Form) にすぎない。」(ZU, 121f.) これまで読者や観客の想像力を刺激することで共通の存在形に気づかせることにより、人々の心をつなぎ合わせ、孤独な現代人の心の傷を癒すとともに、平和な何でもない日常の尊さを感じさせようと努めてきた作者ハントケも、想像力を失った現代人の暴力を目の当たりにして、拘束力を持った「法文」の必要性を認めざるを得ないぎりぎりのところまで追いつめられていたと考えられる。民に対する^{かたりめ}語女の「あなたの同時代的な想像力の欠如 (Phantasielosigkeit) や、頭蓋狭 (Schädelverengung) や、鬱血や、貧弱な夢想 (Traumschwäche) や、イメージの欠如 (Bildunfähigkeit) がまたも間近に迫っている破局の一因なのよ。」(ZU, 47) という台詞にもこの点が如実に現れていると言える。

しかし、依然として想像力が不可欠の要素であることも否定できない。ハントケは睡眠中の彼の無意識の働き、一種の想像力についてこう記している。「長い間目を覚ましていた後に回復をもたらす眠りの最初の兆し。目を閉じると、目を覚ましていた長い時間に私が少しずつ考え集めていた事柄が、一つにつながって見える。継ぎ合わせる穏やかな動き (sanfter Ruck des Sich-Aneinanderfügens)。」²⁰⁾ パブロが苦境に陥ると眠りに入って苦境を脱する道を見いだすという設定もこの無意識の働き (一種の想像力) を物語っている。受容者の想像力を刺激することで共通の存在形に気づかせなければならないという作家の理想と、それと本来相容れない拘束力を持った「法文」の必要性を認識したハントケのジレンマが、パブロの台詞や態度に反映されていると言えよう。

だがこうした動揺の中から予感を通じて、つまり、理屈ではなく感受性を通じてパブロが法文を得る様子が上記の引用に続く台詞によって表現される。しかもそこでは、法が彼の外部ではなく、内省を通じて内部に見い

20) Handke, Peter: Das Gewicht der Welt. Frankfurt a/M (suhrkamp taschenbuch 500), 1979, S. 262

だされる点を指摘しておきたい。「ただ俺の予感に過ぎないが、俺たちのようなものを待っているのはある秩序だ。まだ決して、どこにも[・・・]なかったような秩序が。[・・・]で、どうして俺はこういう秩序を予感するんだ。その現在の瞬間に殆ど無意識のうちに感じている。[・・・]それでこういう秩序の効力がどういうものだと予感しているのか。例えば民が一つでないことの発見だ (die Entdeckung der Völker)。民はまだ発見されていない。言い換えれば、民というものは不完全なままだ。[・・・]その時々の民が世の中に知られるようになるためには、その都度先ず戦争と悲嘆が訪れなければならなかった。そうだ、平時の地上の民 (Erdvölker) の姿を目指すんだ。穏やかな雑踏を、広場での平和な囁きをを。——その一方で、こうしたメルヒェンを理解するには視野が狭くなりすぎている、まさにこの地から、どうやってこのようなものを始めるのか。——さあ、新憲法又は俺たちの昔ながらの真夜中のブルース第1条だ。汝らがかつて奴隷状態にあったことを忘れるな。²¹⁾——見知らぬものを前にしては自らも見知らぬものであることを思え！／^{かたりめ}語女：それに対する私の脚注。汝らの為すこと又は為さざることを語りとして想像してみよ。それは可能か。可、ならばそれは正しい。不可能か。ならばそれは正しくない。」(ZU, 122f.) パブロはこの後、日々の遠権 (das Recht auf die Ferne)、空視権 (das Recht des Raumsehens) 等の新しい人権や、心配禁止 (das Verbot der Sorge) という新しい基本的禁止、及びあらゆる通告、告知の不使用という法の基本理念、願望と思慮という法の性質を述べると、^{かたりめ}語女に促されて、法の発表の場へと向かう。(ZU, 124)

パブロの発表を聞き終えて舞台上に登場した民はパブロが不滅を獲得し損なったと言い、パブロの声や言葉よりも風の音の方がよく聞こえたという。(ZU, 127) それに対して愚者はパブロの声と言葉がなかったなら、風に耳を傾けると言うことはなかっただろうと反論する。(ZU, 127) 民の言う不

21) バルカン地域も長い間ビザンティン帝国やオスマン帝国の支配下にあった点をここで指摘しておきたい。

滅とは言うまでもなく、パブロが厭わしいものとして否定する不滅（朽）であり、パブロの言葉によって民と愚者は風の音を聞くことが出来たということ、パブロが告知したものが、自然に目を向けさせ、風に耳を傾けさせ、各自の想像力を刺激するものであったことが推察される。その後、この飛び領地の民を代表する民と愚者（ZU, 10）の二人が前夜共通の夢を見ていたことが判明するが（ZU, 127ff.）、以前この国の国民は共通の夢で国王を選んでいたことが既に述べられている（ZU, 22）。共通の夢とはハントケの場合共通の存在形を見出すことと言い換えることができる。共通の存在形は共通の経験を前提とし、共通の環境、共通の自然につながる。二人が見たという夢は自然の光景を映じたものだった。自然が、他人の痛みを思いやるのに必要な想像力を刺激し、それが和解につながる。また、自然に目を向けること、空間の広がりを意識することは人対人の関係に人ではない第三者が介入することになり、人と人の間に適度な距離が保たれることにもなりうる。そしてその距離が互いを冷静に見つめ合う助けとなり、和解するための心理的余裕を産み出すことにもなる。

このような見地からすれば、パブロは自分の理想とする新しい法を見つけ出すことができたのだと結論づけることができ、また『村々を巡って』（Über die Dörfer, 1981）のノーヴァの台詞に関してハントケは対談で、戯曲を悲観的な台詞で終わらせるべきではないという思いから書いたと述べているので（ZR, 98）、この作品も彼の従来の立場からすれば、ここで終幕となるべきものだが、この後こうした結論を無効にしてしまうような展開となる。この点について考察したいと思う。

5. 語部（Erzähler）の変貌

先に日常性の持つ偉大さについて述べたが、日常の些細な事柄の持つ大きな影響力について、パブロと空間排除団の首領が示している。首領はその台詞の中で、はじめは世の中に好意を抱いていたが、自らの不器用さと不注意故に世間から疎まれ、やがて彼自身が世間を憎悪するようになり、

空間を排除するようになったことを語っている。(ZU, 96f.) また、新しい法を作る作業がはかどり始めたパブロが、大きな白墨で何かを書こうとした時、それが折れた途端、冷静さを失い、凶暴になる。(ZU, 102) そしてその後の台詞で彼は語女かたりめにこう語っている。「俺の破壊はまさに怒りからじゃなく、自分の中の裂け目、生まれついたかのような底のなさから来るんだ。俺は完全 (ein Ganzer) であった試しはない。そして奇妙なことに、この裂け目は人とのつきあいの中で口を開けたことは一度としてなく、いつも物との関わりの中で開くんだ。しかもまた巨大なものや、複雑なもの、扱いにくいもので開いたことはただの一度もなく、むしろいつも小さなこと、長い間慣れ親しんだこと、至極簡単なことでだけ開くんだ。鍵を床に落としてしまう — コンパスの芯が折れる — 服に腕を通すことができない。すると世界がバラバラになる。ちょうど宇宙の調和を思い浮かべながら階段を上っている時、段の高さが不規則になる。するとすぐにあらゆる関係が崩れてしまう。そして俺はたった一段の不規則な段のせいで、この混乱に更に何か付け加えたくて仕様がなくなる。— 根絶しろ、根絶しろ、根絶しろ、自分自身をも。俺が今まで誰にも言ったことのないことをおまえに言おう。助けてくれ。この先も助けてくれ。どうしても必要なんだ。」(ZU, 104) ここでは日常の些細な事柄を軽視することの危険性が示され、それに対する警鐘が鳴らされていると解釈しうる。日常の些細な行き違いの積み重ねが、大きな民族紛争にまで発展しかねない。この点に関してはまた機会を改めて論じたいと思う。

更に上述の点は創造と破壊が紙一重であることを示しているが、同時に首領とパブロが同質性を持っていることをも示している。つまり、首領とパブロも紙一重の違いしかなくことになる。実際首領はパブロが自分たちを世界から排除しようとしているとしてこう述べている。「この間に空間排除団、領域消尽者、独裁者は俺たちじゃなくなった。それは奴だ。正義を追い求める男、法を追い求めるあの男の方だ。」(ZU, 96)

しかしこの問題はパブロと空間排除団の同質性の示唆だけで終わる問題

ではない。パブロ以外の登場人物達の変貌にも目を向けることで、この問題の示す方向が明らかとなる。

これまで以上に孤独になっている人間を救うために、愛が世界から消えてなくなっていくうちに、あらゆる人々の気持ちを静めてくれる、満たされた無私としての法を見つけなければならないと主張する語女^{かたりめ}が(ZU, 121)、その一方では、この地の開発を指揮し(ZU, 81)、また、自分はもう放浪の語女^{かたりめ}でいることにうんざりした、自分が求めているのは王のような人物であり、自分は王妃になりたいのだ、と言ってパブロを驚愕させる(ZU, 111)。また、パブロの法の発表の後、記録係を務めたフェリペがそのパートナーである避難民の女に助けられながら、記録した法文を読み上げる件がある。(ZU, 129f.) その場面では、死刑の廃止を訴え、アメリカを非難する内容で始まる法文を読み上げるフェリペの声が、次第に空間排除団の声に変わり、フェリペは故郷の緑を呪い、避難民の女は夢や希望、世界の秩序(平和)を呪うようになる。

これらの変貌の意味を理解するために、『第九の国』の中に見られる、語部(Erzähler)の変貌と言うべき事例について述べた箇所を引用しておきたい。その中でハントケはこう記している。「しかしここ数年スロヴェニアを訪れる度に、当地では最近益々新しい歴史物語(Geschichte)が幅を利かせるようになっていた。新しい? それは古風な、しかし次第に新たに転用されるようになった《中欧》と言う伝説だった。しかもこれを口にするのは、無口な退役軍人たちの語る話とは違って、ぼつぼつと現れる語り手(Erzähler)ではなく、集団で現れる、少々声高なスポークスマンたち(Sprecher)だ。或いはこう言おう。ここにも、つまり中欧という歴史物語にも、はじめは語り手たちがいた。だがその地位をいつの間にか殆どスポークスマンたちが占めてしまった。或いはこう言おう。元来は自身が語り手であったものが、その中には私の友人たちもいるのだが、それが別人のように変貌し、スポークスマンの役割を演じるようになったのだ。そして特に、多くの口から語られ、新聞、月刊誌、シンポジウムで告知された、こ

のスポークスマンどもの歴史化しようとする行為が、このスロヴェニアの客人 [ハントケ] の目から見たときに、この国の事物をその都度より一層、先に触れた非現実生、非具体性、非現在性へと現実から引き離していったのだろう。」(LS, 187) このスロヴェニアの語部たちのスポークスマンへの変貌が、^{かたりめ}語女の、想像力の大切さを訴える放浪の^{かたりめ}語女から権力に取り憑かれた猛女への変貌に反映しているのではないだろうか。^{かたりめ}語女を単純に作家・語部 (Erzähler) ハントケと重ね合わせ、『不滅』が単純に「語りの権利」を主張していると考えるのは早計であろう。²²⁾ ^{かたりめ}語女の仕事は今や語りではなく、正に政治家のそれであり、スロヴェニアのかつての語部たちはスポークスマンとなって「中欧」という概念を喧伝している。どちらにも言えることは、日常的に見られる小さな不滅の物語を語ることよりも、非日常的ないわゆる偉大なものを持つ不滅さに目を奪われてしまっている、ということである。これまで考察した内容から、そこには想像力の喪失という危険性が潜んでいると考えられる。

上記の点及びこれまでに論じた内容を考慮して、ここに見られる登場人物達の変貌の背景にある作者ハントケの内面に焦点を当てて考察を加えると、次のような解釈が可能になろう。

人々の想像力を刺激することによって各自に共通の存在形 (共通の思い出、共通の夢) を認識させ、それによって人々に連帯感を得させ、世界の平和や秩序をもたらしたいと願う作家(ハントケ)が、語り (das Erzählen) という手段を放棄し、明文化され確定した、読む者の想像力を刺激することのない「法文」の作成という手段に頼ったならば、もはや各自の中にある法、共通の存在形に気づかせることができなくなり、空間排除団同様、いよいよ想像力を枯渇させる方向に拍車をかけることになり、当初の目的とは全く逆の結果を招いてしまうことになるだろう。正に空間排除団首領

22) Vgl. dazu, Villinger Heilig, Barbara: Der Schlaf der Gerechten vertreibt Ungeheuer. In: Neue Zürcher Zeitung. 10.2.1997

Rennhofer, Maria: Die Geschichte als Erzählung. In: Tiroler Tageszeitung. 10.2.1997

と同じ轍を踏むことになる。パブロが法を完成させることに對し、民やフェリペといった他の登場人物達が不安を抱くのもこのためではないだろうか。結果を焦るあまり、想像力を刺激して内なる法に気づかせるという、時間を要する手段を捨て、法を作品中で明文化して発表するということは、現代の語部の一人である作者ハントケには厳に禁じられた行為であり、『不滅』はハントケのそうしたジレンマを表現しているとも見ることができよう。

6. 結語

最後に語女^{かたりめ}が観客に向かって言う。「これで私たちのお話 (Geschichte) はおしまい。私は前もってこの話を知っていたわけじゃなくて、話 (Erzählen) が進むにつれてようやくはっきり、というより半ばははっきりしてきたのよ。」(ZU, 133)彼の創作方法や、作品の中に自分の弱点として自らをあらわにしなければならないとする彼の意見とを考慮すると²³⁾、この台詞はおそらく作者ハントケの偽らざる心境を述べたものであろう。孫達に自分の二人の息子の復讐を託して死んだ祖父に對し、復讐を託された孫達は復讐よりも平和を求め、そのうちの一人は平和をもたらす新しい法を模索する。そしてついに新しい法が見つかり、それを発表し、飛び領地の民を代表する民と愚者が共通の夢を見たことが判明し、一見ハッピーエンドに終わるかに見える。しかし、その後この法を否定するような展開を見せ、更に語女^{かたりめ}が次のように言う。「驚愕を先に延ばしておくには、ここでされたように、法を暗示するだけにしておいた方がいいわ。」(ZU, 134)正に、いったん提出したものを撤回する展開となっている。この台詞は『反復』(Die Wiederholung, 1986)の結末部にある「語りよ、繰り返せ、つまり、新たにせよ。あつてはならない、決定というものをそのつど新たに先送りしながら」²⁴⁾という言葉に沿う内容だが、これはしかし、本作を執筆したハント

23) 既出各拙論を参照のこと。

24) Handke, Peter: Die Wiederholung. Frankfurt a/M (suhrkamp taschenbuch 1834), 1992, S. 333

ケの心境の変化を表しているとも解釈し得る。『村々を巡って』では、ハンスの悲観的な台詞で終わるところをそれで終わらずに、ノーヴァの最後の長丁場を付加したように、本作ではパブロの法の発表及び民と愚者の共通の夢で終わるべきところを、想像力の枯渇に益々拍車をかけかねない、明文化された法を否定せずに終わらせることはできないと感じたハントケがその後の部分を書き加えたと考えることができるだろう。

現代という横暴な時代を一刻も早く変えなければという気持ちが、人々の心をつなぎ平和をもたらす、法文と語りを融合するような新しい法の模索に駆り立てる一方で、法が明文化されてしまえば、それは人々の想像力を刺激し得なくなり、当初の目的に逆行する結果になるという意識に追いつめられた、作者ハントケの苦悩が『不滅』に表現されてると言えよう。ただ、この過程が、語りの持つ重要性を再確認することにもつながり、『冬の旅』における激しいジャーナリズム批判と、セルビアの日常的な個々の事例を「語る」という文体に結びついたと考えることができる。

（学習院大学助教授）

Die Leiden des schwankenden Schriftstellers

— „Zurüstungen für die Unsterblichkeit“
von Peter Handke —

Toshihiro Karino

Das Stück „Zurüstungen für die Unsterblichkeit“ behandelt die Unsterblichkeit. Aber dabei dreht es sich nicht um die Unsterblichkeit aufgrund von Größe oder Ruhm, sondern um die Unsterblichkeit der Kleinigkeiten, die sich im Alltag wiederholen und dem Alltag sowie gewöhnlichen Menschen Würde geben.

Der das neue Gesetz, das sehen und gesehen werden muss, suchenden Hauptperson Pablo steht die die Vereinigten Staaten darstellende Raumverdrängerrotte gegenüber. Der Raum gibt bei Handke den Einzelmenschen erst ihre Gestalt, Würde und ihr Recht. Von diesem Standpunkt aus kann man so schließen, dass die Raumverdrängerrotte, die USA darstellt, im Gegensatz zu Pablo und Handke, die Menschen ihrer Gestalt, Würde sowie ihres Rechts beraubt. Das Schema, Pablo und Handke contra die Raumverdrängerrotte und USA, reflektiert den Unterschied zwischen Handke und USA im Bezug auf den Standpunkt gegenüber dem Bruderkrieg in Ex-Jugoslawien.

Den Verdacht gegen „die jetzige Zeit“ sagt Pablo aus, die uns alles, „jetzt den Einheitstaumel, jetzt die Vereinzelung,“ gibt. Vor der Gefahr des Verschwindens der Liebe und damit des Friedens aus der Welt soll er dem Volk das Gesetz, d.i. die „ausdrücklichen Vorschriften“ geben. Aber Pablo schwankt. In diesem Hin-und-her-

Schwanken und auch den letzten Szenen, wo sich an das dem Zuschauer und Leser das Ankommen einer neuen Zeit ahnen lassende Gespräch zwischen dem Volk und Idioten die drohende Rede der Erzählerin anschließt, kann man die Unsicherheit des Autors Handke erkennen. Er muss Pablo das ausdrückliche Gesetz, das der Welt die Liebe und den Frieden geben soll, aber den Menschen die Einbildungskraft abnimmt, geben lassen, während das sanfte Gesetz, das Handke sowie den Menschen unentbehrlich ist, nur durch die Phantasie ergriffen werden soll. Darin drückt sich Handkes Dilemma aus, dass er den Zerfall Ex-Jugoslawiens mit dem die Liebe und den Frieden bringenden ausdrücklichen Gesetz möglichst schnell zum Stillstand legen wollte, aber er dazu kein anderes Mittel hat, als dass er mit seiner Schrift und Geduld die Phantasie, die die Verbindungskraft hat, bei den Menschen zu erwecken.